

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 30 日現在

機関番号：32417
研究種目：基盤研究(C) (一般)
研究期間：2014～2016
課題番号：26463466
研究課題名(和文) 認知症サポーターによる「身近なサポート」システム構築に向けたアクションリサーチ

研究課題名(英文) Action research for building a support system for the people with dementia

研究代表者
荒川 博美 (Arakawa, Hiromi)
西武文理大学・看護学部・講師

研究者番号：50570131

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)： 認知症サポーター支援プログラム作成にあたり活動意欲を高めるためには、介護経験の含有、養成講座受講の自由意思の尊重、認知症についての知識理解、活動時間への配慮が必要である。また、介護者自身が困っていることを発信しやすい地域づくり、すでに介護を経験した人々が同様に介護の大変さやその経験を広く地域社会に伝えていくことが認知症者と介護者にとっての身近なサポートになることが示唆された。

さらに、サポートシステム構築には、単に一方のみではない形成と維持のスタイルがあり、それぞれのスタイルに寄った支援が必要である。

研究成果の概要(英文)： The suggestions for the program were as follows: To include contents from people who has experienced care or has been involved in such activity, to respect the free will of the attendants of the session, to deepen the understanding of dementia, and to take in consideration of the time taken for the activity. In addition, it is suggested that developing communities where family caregivers can access their hardships easily and sharing them is important. Also, people who have experienced care for people with dementia are expected to share their experiences to the community which will become the support for people with dementia and the family caregivers.

Furthermore, there is an interactive style to communicate in order to build a support system, and support which approach those style is effective.

研究分野： 認知症サポーターをはじめとした地域における支援活動や職種間連携

キーワード： 認知症サポーター サポートシステム 地域 活動

1. 研究開始当初の背景

高齢化に伴い、今後認知症高齢者のさらなる増加が推測されている。オレンジプランでは、7つの柱を挙げており、その中に地域での日常生活・家族の支援の強化がある。内容は、認知症地域支援推進員の人数の増加、認知症サポーター養成600万人を目標とすること、市民後見人の育成、認知症の人やその家族等に対する支援などである。しかし、認知症サポーターについていえば認知症養成講座の主たる目的は認知症と認知症の人を理解することであったため、認知症サポーターを活用した認知症の人・家族への具体的なサポート体制の構築については課題となっている。

在宅で生活する認知症高齢者の日常生活支援において、買い物・金銭管理に関係し店舗従業員への研修、地域住民への啓発活動の課題がある。また、地域での声かけ・見守り・小さな手助けとして、ごみ出し・差し入れ、安否確認などの生活の困り具合に則した「身近なサポート」へのニーズもあると考えられる。近隣・友人によるインフォーマルな体制も含め、認知症地域支援推進員、地域包括支援センター職員などの専門家を交えたシステム化が必要である。

2. 研究の目的

平成26年度～28年度の3年間のB市でのアクションリサーチを通して、認知症サポーターが、地域で暮らす認知症の人・家族のニーズに則した「身近な手助け活動」ができるためのサポートシステム構築プロセスを明らかにする。また、地域住民・保健医療福祉の専門家がアクションを起こすための要因・要素を探る。

3. 研究の方法

研究の目的を達成するために以下の3つの研究を順を追って実施していく

- (1)研究1：B市における認知症サポーターの活動実態を調査する
- (2)研究2：B市介護家族の会を中心とした認知症介護経験者へのインタビュー調査を行う
- (3)研究3：認知症カフェ等における認知症サポーター活動のプロセス、それにかかわるスタッフの評価について調査する

4. 研究成果

(1)研究1：

目的

認知症サポーターの活動実態と活動をする上での要望、活動していない理由を記述回答によって調べ、認知症サポーター養成講座修了者の地域活動における支援課題を明らかにすると共に、認知症サポーターの活動をエンパワメントする支援プログラム作成のための示唆を得る

方法

認知症サポーター養成講座を修了した388人を対象に自記式質問紙調査を行った。

結果

認知症サポーターの基本属性は、女性が約7割を占め、平均年齢66.1歳、最少年齢20歳、最大年齢93.0歳であった。職業は無職が32.2%、主婦が29.4%であった。町内会・老人クラブ・ボランティア活動・近所付合について、参加している人はそれぞれ、73.6%、34.8%、60.5%、79.7%であった。また、社会参加意欲については93.0%が「社会参加意欲あり」と回答した。認知症の人と関わった経験については「関わり経験あり」が56.8%、認知症の人の介護経験は「経験あり」が41.5%であった。養成講座受講状況について受講動機は「自分から希望した」が62.0%、受講回数は「3回以上」が14.6%・「2回以下」が85.4%であった。知識理解度は、「認知症は病気である」、「早期発見・早期受診が重要である」、「生活習慣に気をつけることが認知症予防につながる」、「脳活性化が予防につながる」、「声をかけるときは、驚かせないようにする」、「余裕をもって対応し、認知症の人のペースに合わせる」、「相手の言葉に耳を傾け、自尊心を尊重する」の7つの項目では90%以上が「分った」と回答した。以下の3つの項目「認知症の人は少しの声掛けや手助けで自分で実行できることが多い」、「本人には自覚がある」、「出現している症状には意味がある」では、それぞれ81.0%、60.8%、68.9%であった。

認知症サポーターとしての活動状況は、「活動している」は25.9%、「活動していない」は74.1%であった。活動していない場合の理由については、カテゴリ化した結果、「認知症の人との出会いがなかった」、「活動のための切っ掛けがなかった」、「活動に費やす時間がなかった」、「体調がよくない」、「介護の仕事をしている」、「認知症サポーターとしてもう少し学びが必要」という6個のカテゴリと、20個のサブカテゴリが得られた。今後活動に費やせる時間・内容については、活動頻度は「週3回以上」16.7%・「週2回以下」83.3%、活動時間は「30分程度以上」81.4%・「15分程度以下」18.6%であった。

認知症サポーターの活動をするうえでの要望は「困った時に相談する場所がほしい」51.9%、「体験・実習を取り入れた研修会をしてほしい」41.8%、「認知症サポーターが地域で交流できる場所がほしい」32.7%「サポートを必要としている認知症の人・介護家族の情報がほしい」36.0%、「勉強会を開催してほしい」30.1%、「認知症サポーター同士で仲間づくりをしたい」25.4%、「ご近所に自分が認知症サポーターであることを知らせて、役に立ててほしい」19.1%であった。

「認知症サポーターが地域で交流できる場所がほしい」と回答した人から、具体的にどのようなものがあったらよいか、85件の記述回答があり、カテゴリ化した結果「気軽に自

由に集える場」、「活動できるための力を得る場」、「専門家の人がいる場」、「情報交換ができる場」、「認知症サポーターが相談できる場」、「介護される人、介護する人の両方が集える所」、「地域の拠点を活用した場」の7個のカテゴリと、20個のサブカテゴリが得られた。

考察

活動意欲を高めている要因は、ボランティア活動への参加、社会参加意欲、認知症の人との関わり経験、養成講座受講動機が主体的であること、知識理解が高いこと、活動時間が取れることの6つであった。活動意欲が高い人の方が、実際に活動しているという結果を踏まえ、これら6つの要因への働きかけにより、活動意欲の低い人の意欲を高め、実際の活動ができるように支援していくことが必要であると考えられる。

一方、活動意欲が高くても活動していない認知症サポーターが25%という結果がでており、意欲を高めることだけではない支援課題が示唆されている。今後認知症サポーターの活動の活性化を促すには、活動意欲がながらも活動出来ていない人にどのようにはたらきかけていくかも鍵となる。活動していない理由の記述回答では「認知症の人がいなかった」というカテゴリが示されており、認知症の人との関わり経験がないサポーターは支援の必要な認知症の人の把握が難しく、「対象がいなかった」ととらえる傾向があるのではないだろうか。関わり経験がない認知症サポーターは、活動を実際に行うにあたっては、活動イメージが付きにくいことも推察される。この傾向は、これまでの国のサポーター養成が、受講生の認知症の理解を目的に実施されてきたため、受講後何かを出来るようにということ考えたプログラムではなかったことが原因の一つであると考えられる。

また、活動していない理由の一つとして、「活動のための切っ掛けがなかった」というカテゴリがある。最初の行動のためには、他者からの同意や後押しが必要な場合があると考えられる。内閣府の調査1)では、地域活動を行うための条件として「一緒に活動する仲間がいること」「参加を呼びかける団体、世話役があること」が挙げられている。活動のための切っ掛けの提供などの支援があるとよいと考えられる。

さらに、活動していない理由に「認知症サポーターとしてももう少し学びが必要」というカテゴリが抽出されている。活動意欲が高くても活動していない認知症サポーターが活動できるためには、こういったサポーターの学びへのニーズを満たしていくことが大切であると考えられる。

示唆

支援プログラム作成のために以下の1)~4)の示唆を得た。1) 活動意欲を高めるために、介護経験・関わり経験のできる内容を取

入れること、養成講座受講の自由意思を尊重すること、認知症についての知識理解を深めること、活動時間への配慮をすること、2) 活動していない認知症サポーターのために、活動するための切っ掛けづくりを支援する、3) 活動できるための力を得られるような支援をする、4) 認知症サポーターの要望をプログラムに生かしていく。

<引用文献>

1) 内閣府「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査 平成25年」
<http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h25/sougou/zentai/pdf/s2-1.pdf> (2016.1)

2) 久木田純(1998). エンパワメントとは何か 人間尊重社会の新しいパラダイム. 現代のエスプリ, 376; 10-34.

(2)研究2:

目的

認知症の介護経験がある人の自身の介護体験の語りを基に介護中の困りごと、あればよいと思う身近なサポートを明らかにする

方法

研究デザイン：質的帰納的記述研究

研究対象者：B市在住の介護経験のある家族介護者11名

データ収集:

半構造化面接を行い、内容はICレコーダーに録音後、逐語録に起こし質的帰納的に分析した

結果

介護経験のなかで体験した思いと困りごとは、【認知症を発症したことへの困惑と介護を継続していくことへの先行きの不安を感じている】、【自分の仕事や家庭生活を営みながら日々折り合いをつけ、介護を続けている】、【認知症の家族を介護していることを他者に理解してもらえると介護負担感が低下する】の3つのカテゴリで構成された。

まとめ

介護者自身が困っていることを発信しやすい地域づくりをすること、すでに介護を経験した人々が同様に介護の大変さやその経験を広く地域社会に伝えていくことの重要性が認知症者と介護者にとっての身近なサポートになることが示唆された。

(3)研究3

目的

本研究は認知症サポーターが、地域で暮らす認知症の人・家族のニーズに則した「身近な手助け活動」ができるためのサポートシステム構築プロセスを明らかにすることを目的に、認知症サポーターのたまり場において、認知症サポーターの学びを支援するプロセスを明らかにする。

方法

対象:

認知症サポーターのたまり場に参加した

認知症サポーター数名程度、及び認知症サポーターのたまり場に参加した認知症地域支援推進員、保健師、ボランティアなど 10 名程度。

データ収集：

反省会・打ち合わせ会議での議事録の内容について、出席者の同意が得られた場合に、ICレコーダーに録音をし、逐語録に起こし質的帰納的に分析する。

結果

認知症サポーターは様々な年齢、職業経験、家族背景のある人々がいる。目的優先的に収集されてくるものではなく、むしろ人づたいに自然と集まってくる傾向があった。人と人とのつながりを感じてというものだったり、核となる人物の人柄にふれて形成されてきていた。一方では、専門職が中心に働き、地元の有志を巻き込んで形成することもあった。

認知症の人や家族を地域の中でサポートするためには、単に一方向のみではない形成と維持のスタイルがあり、サポートシステム構築には、それぞれのスタイルに寄った支援が必要である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

荒川博美、森實詩乃、熊倉典子、室橋正枝、栗原洋子、渡辺香織、海老原美保、長谷川博子、大館洋子、神山美智子 (2016). 認知症サポーター養成講座修了者の活動意欲と地域活動をエンパワメントするための支援課題, 日本認知症ケア学会, 15(3)、634-646、査読有。

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：

番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

荒川 博美 (ARAKAWA, Hiromi)
西武文理大学 看護学部・講師
研究者番号：50570131

(2) 研究分担者

加藤 基子 (KATO, Motoko)
帝京科学大学 医療科学部 教授
研究者番号：60290053
平成 27 年 3 月 13 日削除

森實 詩乃 (MORIZANE, Shino)
帝京科学大学 医療科学部 講師
研究者番号：70583954
平成 28 年 3 月 17 日削除

(3) 連携研究者

()

(5) 研究協力者

()